

永遠の憧れ “絵本の世界” に 出会うプロジェクト

1 目的・概要

保護者でもなく、保育者でもない私たちメンバーが、絵本をきっかけにして、同志社幼稚園で、園児さんが感覚を目一杯に使って楽しみながら新しい世界を発見することができる。そうした、園児さん参加型のイベント（及びワークショップ）の提供を目的として活動しました。秋学期には同志社幼稚園で、「おおきなえほん」と題した、大人が訪れても大きくワクワクを感じる程の「絵本の世界（空間）作り」を提供するイベントを行いました。



ワークショップ風景（11月）

Annual Schedule

2016年	4月	絵本読書会
	6月	16日 be- 京都でのミニイベント開催（メンバーが2班に分かれ絵本をモチーフにした内容、参加者はメンバーのみ）
		30日 同志社幼稚園で絵本の読み聞かせ演習を実施
	7月	同志社幼稚園でのイベント（及びワークショップ）の企画 春学期の振り返り
	8月～10月	同志社幼稚園でのイベント（及びワークショップ）企画 幼稚園調査訪問
	11月	10日11日ワークショップ開催 22日イベント開催
	12月	8日 イベント開催 プロジェクトの振り返り
2017年	1月	成果報告会の準備実施

2 成果達成度

活動の集大成となる秋学期のイベントの狙いは、「園児さんたち全員に絵本の世界に触れてもらうこと」。具体的には、子ども達が楽しみながら絵本と季節に触れる機会を同志社幼稚園で計4日間（ワークショップ2日間含む）にわたり計約100名の園児さん（年少・年中・年長）に提供しました。

イベント当日、園庭いっぱい、四季をモチーフにした、カラフルで可愛くて、園児さん達の背丈の何倍も大きくて、子どもも大人も見ただけでワクワクするような「おおきなえほん（高さ約3メートル、幅約2メートル）」と、その周りを囲む通路やトンネルのある空間を作りました。また、絵本にたどり着くまでの順路を絵本に近づくにつれて狭くし、より園児さん達が絵本の世界に入り込めるような工夫も施しました。

「おおきなえほん」は計4ページあり、その中身はイベント前のワークショップで園児さんが描いた「四季」を貼り付けた、世界にたった一つだけのオーダーメイドです。だからこそ、園児さんはもちろん子ども達たちが持つ、ドキドキワクワクが止まらない「世界への好奇心」を刺激し、イベント空間に「好き」や「おもしろい！」をぎゅっと集めることが出来たと考えます。

春学期にゲストレクチャーをして頂いた外部の先生（幼児教育科）によれば、私たちメンバーは園児さんや子ども達にとって憧れの存在であるようです。

本イベントは、保護者でもなく、保育者でもない私たちメンバーが独自の視点で作上げたからこそ、私たちメンバーが持つ生の直接的なメッセージが届けたのではないかと思います。園児さん達が絵本の世界で遊んでいる最中の笑顔や楽しんでいる様子、そしてイベント後の「楽しかった」「もう一回絵本の世界に行きたい!」「また来てね!」といった声は、その何よりの証拠です。

この経験を通じて私たちメンバーは、絵本の価値を再認識するようになりました。私たちメンバーの中には、プロジェクト参加当初、絵本は時代とともに社会のなかで存在感が薄れていっていると感じていた者もいました。しかし、本プロジェクトを通じて絵本と正面から向き合い、多角的に捉えることでその考えは大きく変わり、最後には絵本を切り口とした教育や社会の問題についても考えが広がるようになりました。



おおきなえほんを取り囲む通路



おおきなえほん



トンネル

3 プロジェクトを通じて

本プロジェクトを通じて私たちメンバー全員に共通していえることは、「答えがすぐには出ない問いに対して自分がどう働きかけてゆくか」という問題解決に対するアプローチ方法が、履修前より今は、断然多岐に渡り広がっているということです。

メンバーは春学期と比較しても間違うことを恐れずに秋学期はそれぞれのバックグラウンドや知識から様々な意見を積極的に出し合うことができました。これは、私たちメンバーみんなが他の人の意見に耳を傾けた上で議論を進めていく議論の形態を取り、雰囲気も落ち着いていたからだと考えます。

また、そのような議論だけでなく、そこから自らができることを派生させ、メンバーそれぞれが自発的に仕事を担い動いて、自らが汗を流し、最後まで働きかけることができました。ほとんどのメンバーがおおきなえほん制作のために知識のないなか、設計図を描いたりベニヤ板を削ったり、とにかくよく考え手を動かし新しいことに挑戦しました。

最後に、絵本とは「読むもの」という印象が強いと同時に、読む以外のアプローチは各家庭や保育の場ではなかなかできません。しかし、私たちメンバーが絵本を「読むもの」ではなく、「創るもの」として捉え、私たちメンバーが、あふれんばかりのエネルギーを持つ園児さんたちと共に汗を流して本イベントを作り上げたこと自体に、本プロジェクトの意義があったと思います。この貴重な経験を通じて、園児さんにとっても私たちにとっても新たな絵本の可能性を知る契機となったと考えます。



編集後記

本プロジェクトは「絵本の世界（空間）づくり」と一口に言っても、規模が大きく途中で困難な壁がたくさんありました。夏休みに何度も集まることも多く、他の活動との兼ね合いに苦戦するメンバーも多々いました。

しかし、プロジェクトリーダーはじめ、全員が全員、自分ができる最大限のことを行動に移せるようなプロジェクト活動でした。この人がしんどそうだったら、私がやるという自発的な意思に満ち溢れたメンバーが日を追うごとに増えた様と感じました。

また、大学生ではそう簡単に出会う機会がない造園業者さんと共に汗を流し、釘を打ち、幼稚園の園長先生からご意見を頂ける機会がありました。さらには、秋学期のイベント後の振り返りの際には、春学期にゲストレクチャーをして頂いた外部の大学（幼児教育科）の先生を、メンバー自らが企画してもらう一度お呼びして、イベントに対して私たちメンバーが出した結果や考察が真っ当なものであるか、ご意見を求め議論をさせて頂きました。

春学期に be- 京都で行ったイベントや幼稚園での絵本の読み聞かせ演習、夏休みの幼稚園調査訪問などを通して自然とメンバーそれぞれが推進力を身につけ、秋学期にはとても活発な活動をできたと思います。

プロジェクトメンバー

平尾 志帆(文2) 高戸 梨奈(文3) 西島 千絵(社会3) 吉本 朱里(社会3) 大野 篤子(法3)
澄川 あかり(法4) 辻 香苗(経済2) 奈良井 志帆(経済3) 松田 朋子(商2) 川見 悠佳(商3)
上林 真由香(商3) 河瀬 哲郎(政策2) 宇野 夏世(政策3) 西 遥菜(SA)

